第２章　史跡を取り巻く環境

第１節　自然環境

１ 位置

(1)茅野市の概況

特別史跡「尖石石器時代遺跡」のある茅野市は、日本列島のほぼ中央、長野県南東部の諏訪地域に位置します。

諏訪地域は３市２町１村からなり、東は県東部の佐久・上田地域、北は県中部の松本平、西は県南部の伊那谷、南は山梨県の北部地域と山や峠を境に接しています。岡谷市、下諏訪町、諏訪市が位置する北部地域は、諏訪湖（標高 759 m）を中心に「湖盆（こぼん）」と呼ばれる平地が広がりますが、茅野市、原村、富士見町が位置する南部地域は八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰山塊の麓に発達した台地・扇状地・谷などの複雑な地形からなる山地となります。

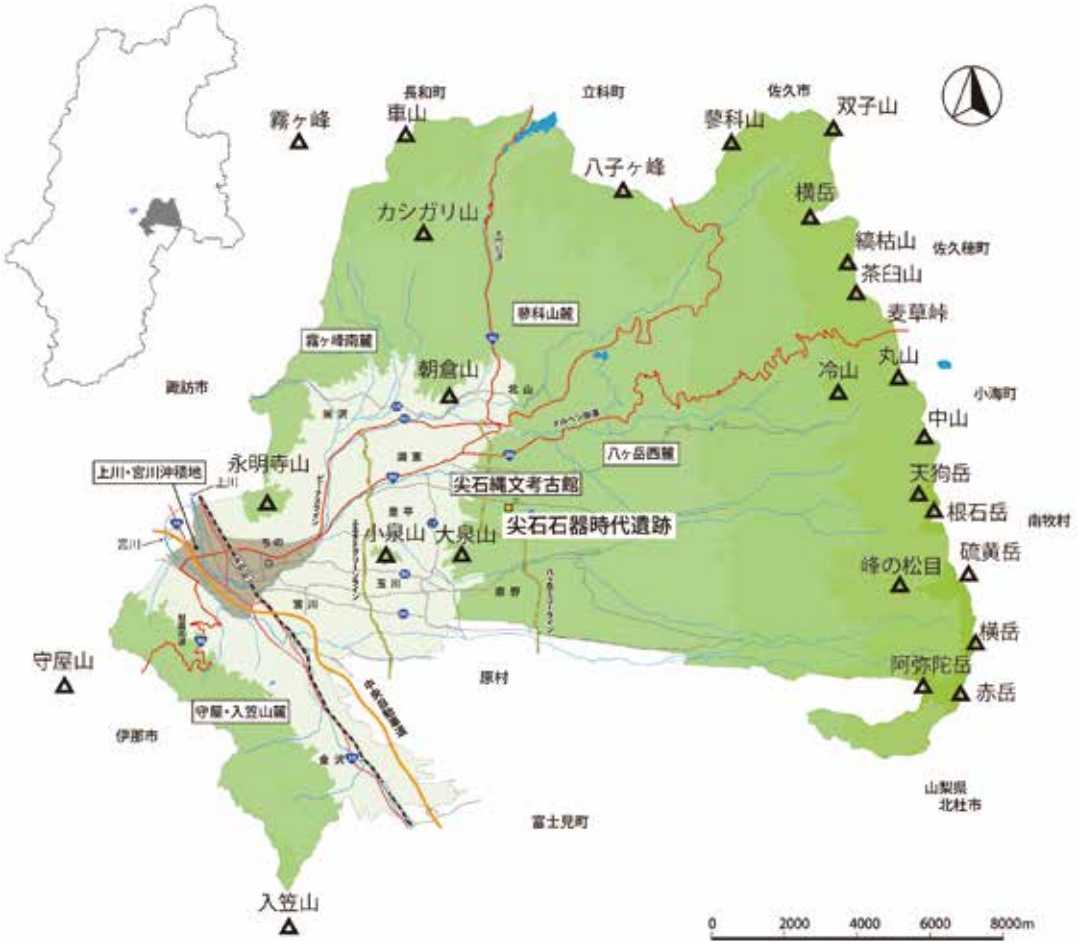


図 2-1　茅野市と尖石石器時代遺跡の位置

諏訪地域のほぼ中央に位置する茅野市は、「湖盆」から続く平地の一部と、山地からなる風光明媚な高原都市です。東－西 23.55㎞、南－北 20.55㎞、周囲 96㎞で、市域の総面積は 265.88 ㎢です。東に赤岳（標高 2899 m）を最高峰とする 2000 m級の山々が連なる八ヶ岳と蓼科山（標高 2530 m）、北に主峰車山（標高 1925 m）から西へ続く霧ヶ峰と永明寺山（標高 1119 m）の山塊、西に赤石山脈（標高南アルプス）の北に続く守屋山（標高 1650 m）と入笠山（標高 1955 m）がそびえ、三方を山に囲まれています。これらの山並みの中腹に発する湧き水の小川が、台地

や扇状地を開析し、谷を刻みながら西へ向かって流れ下ります。やがて、上川と宮川の 2 大河川となり、JR 中央東線茅野駅付近に標高 800 m前後の平地（上川・宮川沖積地）を形成します。ここを中心に茅野市の市街地が広がります。市の庁舎は、北緯 35° 59′、東経 138° 09′ に位置し、標高 801 m と全国にある市の庁舎の中で最高地点にあります。

主要な道路や交通機関として、市域の西側を国道 20 号（甲州街道）、中央自動車道、JR 中央東線が南北に並走し、関東圏と中京圏を結んでいます。また、県東部と県南部を結ぶ主要な道路の国道 152 号が市街地で交差しています。このような交通の要所となる地理的環境が、近・現代の製糸、寒天、精密等の主要な産業を支えてきましたが、この地域に多くの縄文時代の遺跡や優れた遺物が残されたことと関係があると考えられます。

2 気候・気象

茅野市の気候は、年間を通じて晴天が多く、湿度は低い傾向にあります。日中は比較的高温で、夜間は冷える内陸性気候です。史跡は標高 1000 m を超す高冷地に位置することもあり、冬期気温がマイナス 10 度以下になることも珍しくありません。

史跡に近い原村及び諏訪気象観測所の昭和 56 年（1981 年）～平成 22 年（2010 年）までのデータによると、1 年間で一番雨量が多いのは 9 月でどちらの地点も 190mm 前後の雨量となっています。一方、一番少ないのは 12 月で 35mm 前後です。また、近年は「ゲリラ豪雨」と呼ばれる、夏季を中心とした集中豪雨のような特徴的な雨の降り方がみられるようになりました。

日照時間の年平均は、原村の昭和 50 年（1985 年）～平成 22 年（2010 年）、諏訪の昭和 56 年（1981 年）～平成 22 年（2010 年）とも 2,100 時間を超える結果となっています。

昭和 56 年（1981 年）～平成 22 年（2010 年）の風速については、2 地点で若干の相違がありますが、傾向は同様で、3 月～ 5 月が 1 年の中で一番風の強い時期となっています。

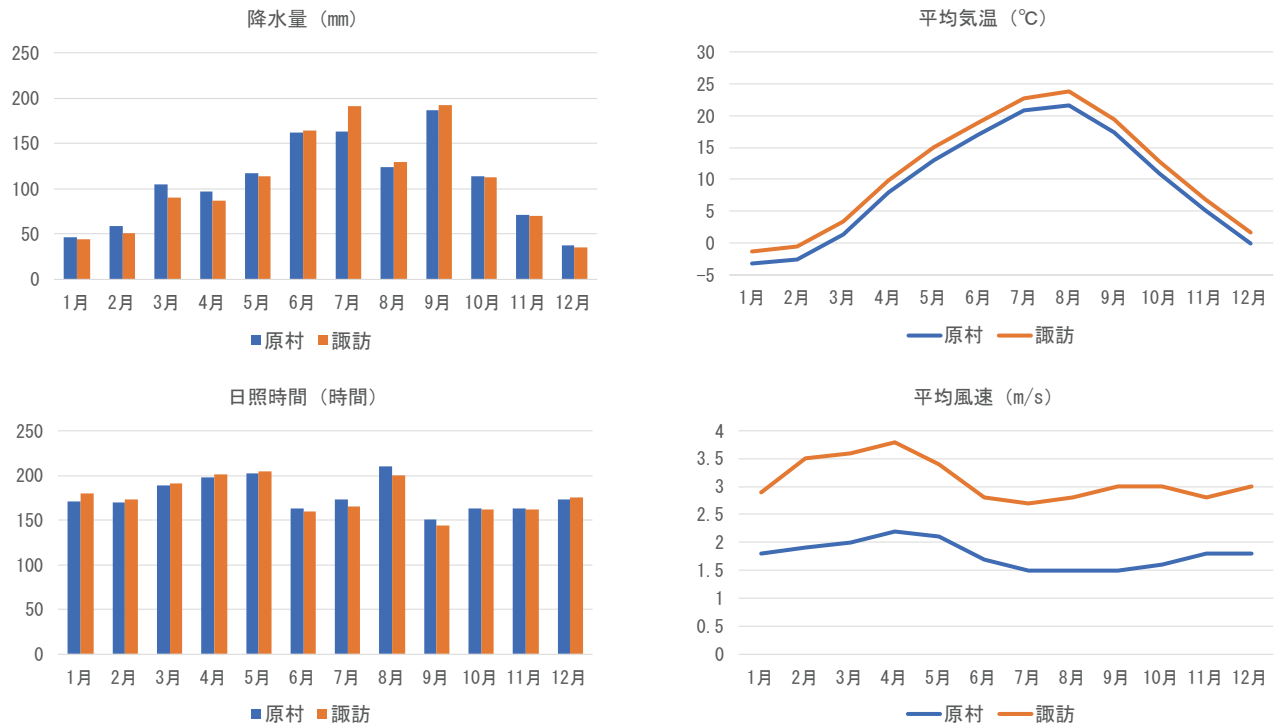


図 2-2　気候・気象
「気象庁（過去の気象データ）」より作図

第２節　　社会環境

１ 人口

平成 27 年（2015 年）10 月 1 日当時の茅野市の人口は、55,912 人でした。30 年後の令和 27 年（2045 年）10 月 1 日現在は、45,751 人と見込まれ、10,161 人、割合では 18.2%、およそ 2 割が減少する推計となっています。

平成 27 年（2015 年）の総人口に占める年少人口（15 歳未満）は、13.9%、生産年齢人口（15 歳以上 65 歳未満）は、57.8%、老年人口（65 歳以上）は、28.4% となっており、特に 65 歳以上について、65 ～ 74 歳帯は 14.6%、75 歳以上は 13.7% の内訳となっています。令和 27 年（2045 年）には、年少人口は、11.0％、生産年齢人口は、48.0%、老年人口は、41.0% となり、特に 65 歳以上について 2015 年の 28.4％と比較して 12.6 ポイント増加し、内 65 ～ 74 歳帯は 16.9%、75 歳以上は 24.1% の内訳となっており、老年人口の増加していることが分かります（出典「茅野市ホームページ」に和暦を追記）。

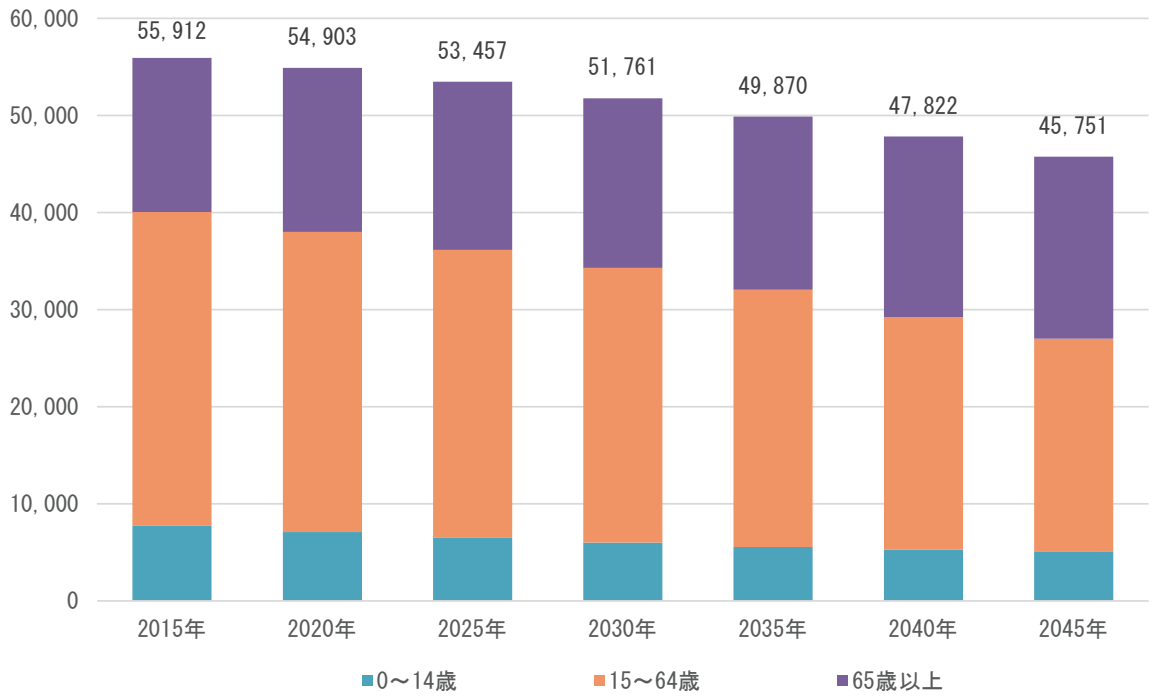


図 2-3　将来推計人口
「茅野市ホームページ」公開データから作図

2 観光

茅野市全体の観光地利用者数は、平成 21 年（2009 年）までは減少傾向で、その後は微増しているものの、回復していない状況です。一方、本史跡に隣接する尖石縄文考古館では、中ッ原遺跡出土の「土偶」（仮面の女神）が国宝に指定された平成 26 年（2014 年）に利用者が大きく増加し、翌平成 27 年（2015 年）は落ち込んだものの、その後も平成 25 年（2013 年）以前よりも多い 50,000 人以上で推移しています。

観光地消費額も同様の推移となっています。

■　茅野市の主要な観光地の観光地利用者数の推移（単位：百人）

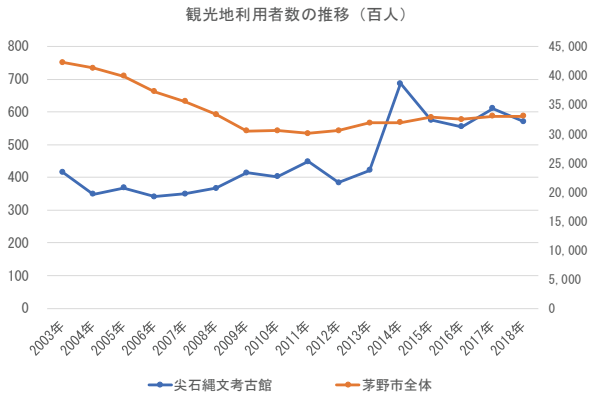
	2003 年	2004 年	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年
蓼科	18,052	17,366	16,682	15,843	15,391	14,348	13,297	13,331
白樺湖	11,660	11,591	11,050	9,960	9,365	8,876	7,829	7,886
奥蓼科温泉	1,611	1,570	1,504	1,208	1,114	1,066	984	984
八ヶ岳	2,419	2,376	2,380	2,406	2,053	1,618	1,644	1,694
車山高原	8,109	8,029	7,909	7,483	7,260	7,036	6,276	6,241
尖石縄文考古館	**416**	**349**	**368**	**341**	**350**	**367**	**414**	**402**
茅野市全体	42,267	41,281	39,893	37,241	35,533	33,311	30,444	30,538

「長野県観光地利用者統計」より作表

■　茅野市の主要な観光地の観光地利用者数の推移（単位：百人）

	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年
蓼科	13,272	13,900	14,587	14,368	15,051	14,756	14,884	14,951
白樺湖	7,620	7,487	7,735	7,809	7,948	7,859	8,045	8,029
奥蓼科温泉	945	923	934	905	922	943	930	930
八ヶ岳	1,696	1,780	1,853	1,834	1,870	1,936	1,938	1,914
車山高原	6,048	6,060	6,328	6,334	6,444	6,398	6,592	6,620
尖石縄文考古館	**448**	**384**	**422**	**687**	**575**	**555**	**610**	**571**
茅野市全体	30,029	30,534	31,859	31,937	32,810	32,447	32,999	33,015

「長野県観光地利用者統計」を基に作表



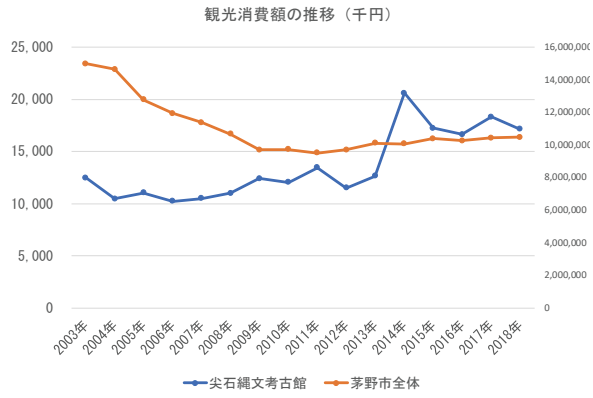


図 2-4　観光地の利用者数
「長野県観光地利用者統計」を基に作図

３ 景観

茅野市は、長野県中部の東寄りに位置し、八ヶ岳西南麓の広大な裾野に広がる、市域の４分の３を森林が占める緑豊かな地域です。

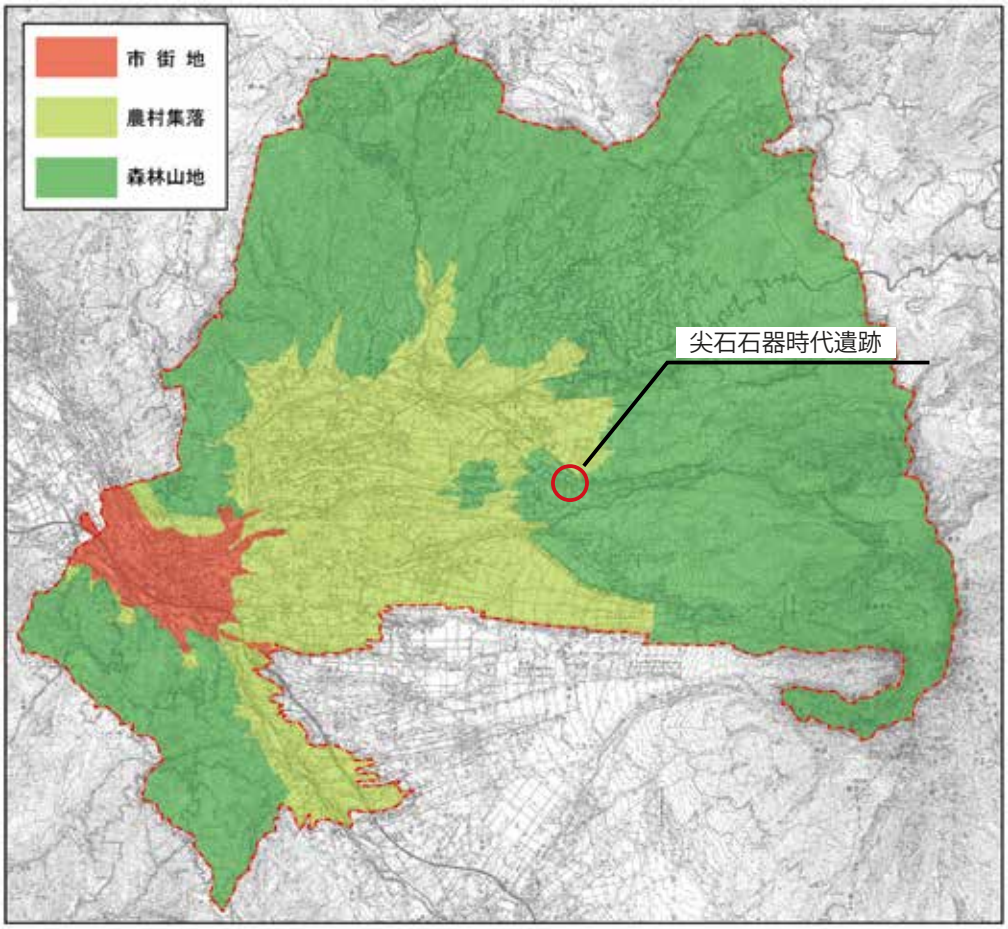


図 2-5　『茅野市景観計画』による景観の地域区分

市の標高の最高地点は赤岳山頂の 2899 m、最低地点は宮川新井の 763 m で、高低差は約 2,100 m となっており、この高低差が気温にして約 12 ℃の差を生じさせ、生育する動植物の種類や人々の生活や土地利用にも大きく影響し、地域の景観を形成するひとつの要因となっています。

地域特産の寒天や寒晒しそば、高原野菜なども、この自然環境によるものであり、独特な風物詩的景観の形成の一翼を担っています。

市西南部の諏訪盆地平坦部から八ヶ岳連峰の裾野までの標高 763 ～約 1200 m の間に多くの集落や農耕地があり、ＪＲ茅野駅を中心に市街地が広がっています。道路は市街地を中心に放射状に各集落を結んでいます 。

市内を通る主要幹線道路からは、八ヶ岳連峰、蓼科山、車山にかけての雄大な山岳地帯を眺めることができますが、屋外広告物の乱立、周辺環境にそぐわない外壁色の建物なども問題となっています。

また、茅野市には歴史や伝統文化に育まれた景観が数多く見られます。

これらの歴史・伝統文化的価値を損なうことのないように、地域、また市民などが一体となって保全に努める必要があります（『茅野市景観計画』より抜粋）。

4 法規制

史跡の周辺は、都市計画法による都市計画区域内の用途地域無指定区域に指定されています。また、長野県屋外広告物条例の「八ヶ岳エコーライン屋外広告物特別規制地域」、茅野市景観づくり条例による『茅野市景観計画』では「農村集落」及び「森林山地」に指定されています。

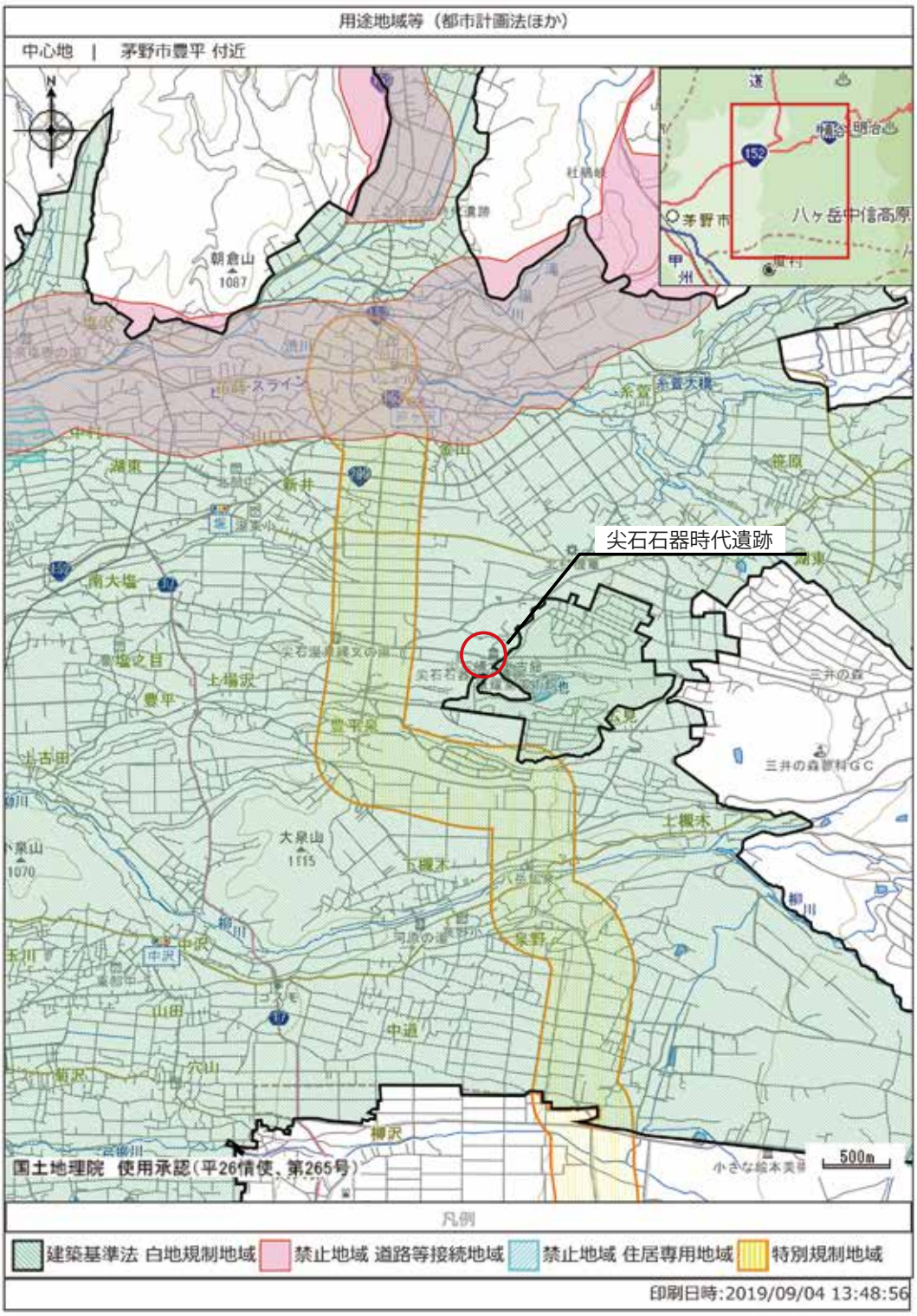


図 2-6　長野県屋外広告物条例による規制
『信州暮らしのマップ』（長野県）に追記

5 その他

茅野市に大きな被害を発生させる可能性のある地震として、「糸魚川 - 静岡構造線断層帯」などの活断層によるものと「南海トラフ巨大地震」などの海溝型が想定されています。

各地震の想定震度が出されていますが、下の図は史跡周辺の糸魚川 - 静岡構造線断層帯（南側）による震度の予測で、史跡の周辺は震度６弱と想定されています。

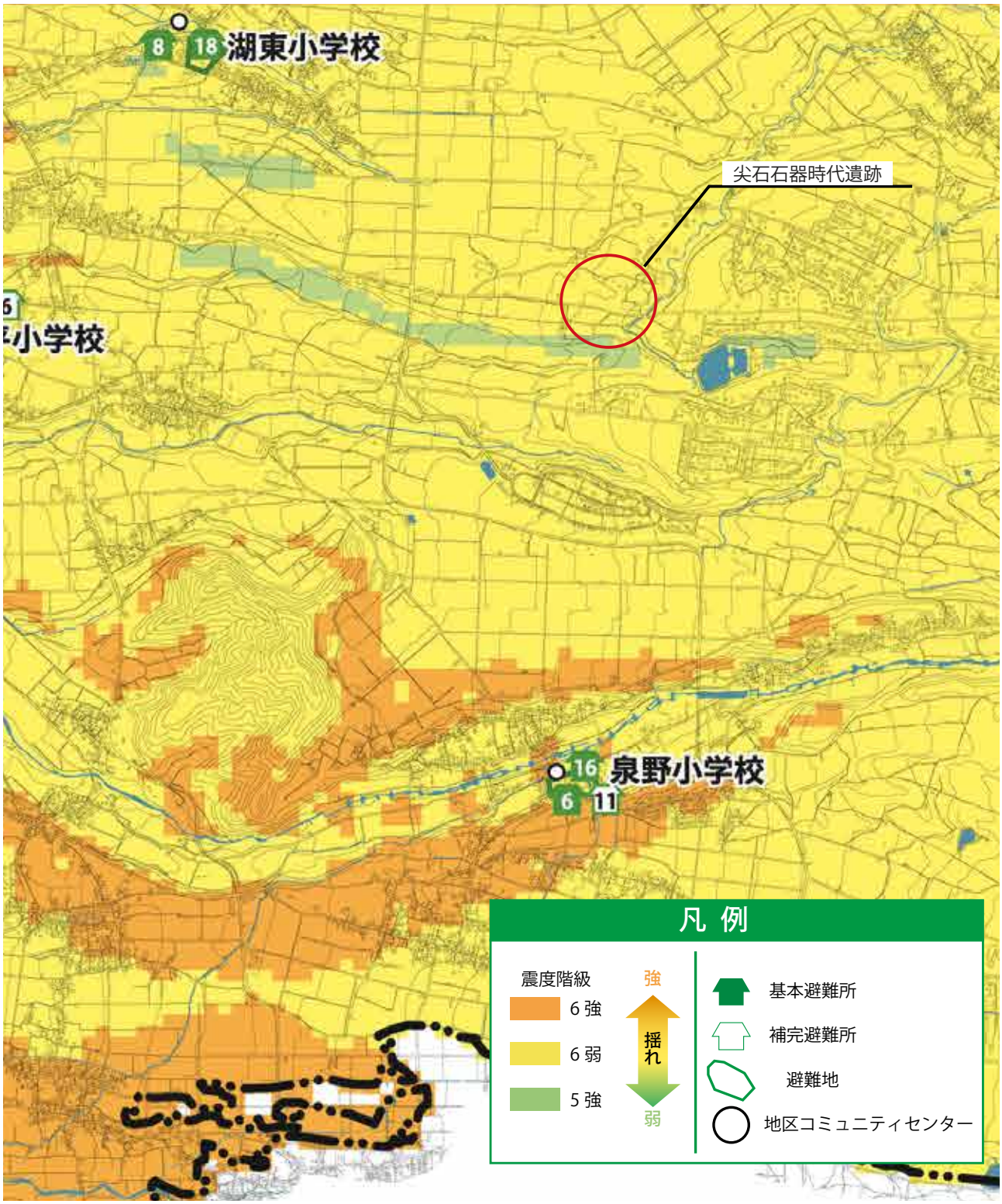


図 2-7　「糸魚川 - 静岡構造線断層帯（南側）」による想定震度
『防災ガイドマップ 保存版』（茅野市）に追記

第３節　　歴史

茅野市域の東側には、赤岳を主峰とする八ヶ岳連峰がそびえ、西麓に雄大な台地が広がり、北側には車山・霧ヶ峰山塊、西側には赤石山脈北端の守屋・入笠山塊が連なり、山裾に扇状地や崖錐地が形成されています。

令和３年（2021 年）１月現在、市域には 348 か所の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）が登録され、縄文文化の宝庫といわれる八ヶ岳西麓を中心に、縄文時代の遺跡が 237 か所あります。その代表的な遺跡が特別史跡「尖石石器時代遺跡」（豊平）、史跡「上之段石器時代遺跡」（北山）、史跡「駒形遺跡」（米沢）です。また、市内の縄文時代の遺跡からは、平成７年（1995 年）に縄文時代の文化財として最初の国宝に指定された「土偶」（愛称:縄文のビーナス、棚畑遺跡（米沢））や、平成 26 年（2014 年）に国宝指定を受けた「土偶」（愛称：仮面の女神、中ッ原遺跡（湖東））などの優れた遺物も出土しています。

歴史時代になっても県史跡「諏訪大社上社前宮神殿跡」（宮川）や県史跡「諏訪氏城跡（上原城）」（ちの）を中心に諏訪の歴史を探ることができ、諏訪上社筆頭神官であった神長官守矢家（宮川）には、中・近世の諏訪上社と諏訪の歴史を知る上で欠くことのできない、県宝「紙本墨書守矢家文書」、市有形文化財「神長守矢家文書」等の古文書が残されています。

また、平成 29 年（2017 年）に、頼岳寺にある高島藩初代藩主の諏訪頼水（1571-1641）と、その父である諏訪頼忠（1536-1606）、母である理昌院（生年不詳 -1645）の廟所が、諏訪市にある温泉寺の同藩主廟所とともに、「高島藩主諏訪家墓所」（ちの、諏訪市）として国史跡の指定を受けています。

図 2-8　史跡等の位置

1 原始・古代

（1）旧石器時代

八ヶ岳周辺で人類が生活を始めたのは旧石器時代です。遺跡は霧ヶ峰や冷山の黒曜石原産地周辺に多く、八ヶ岳中腹の渋川遺跡（北山）や白樺湖畔の市史跡「御小屋之久保遺跡」（北山）等があります。

（2）縄文時代

■ 縄文時代草創期・早期

縄文時代に入ると土器が生活用具として普及し、人々の生活は大きく変化しました。しかし集落はまだ数軒と小さなものでした。洞穴や岩陰なども住居として利用され、県史跡「池ノ平御坐岩遺跡」（北山）や市史跡「栃窪岩陰遺跡」（北山）では数千年にわたる文化層の重なりが明らかにされています。

■ 縄文時代前期

集落を設けて竪穴住居に定住し、土器は底が平らで安定したものがつくられるようになります。この時期の駒形遺跡（米沢）、高風呂遺跡（北山）では、発掘調査の結果、黒曜石を通じて関東や東海方面との交流があったと考えられています。

■ 縄文時代中期

尖石遺跡のような大集落が発達し、文化も高揚した時期であり、集落も台地の中央を広場として環状または馬蹄形につくられています。「縄文のビーナス」等の土偶や石棒のほか、石壇や埋甕といった祭祀施設をもつ住居もあります。土器の製作技術も向上し、顔面把手や蛇体把手などで飾られた力強く豪華なものがつくられます。しかし、中期も後葉になると土器の文様は退化し、形も単純な深鉢形のものが多くなります。

■ 縄文時代後期・晩期

八ヶ岳西麓一帯の遺跡は減少し、規模も小さくなり、中部山岳地帯の独自性をもつ文化は失われていきます。土器は薄手で文様も簡素なものとなり、関東、東北や東海地方の影響を受けたものになります。その原因は気候の寒冷化に伴う食料の減少などが考えられています。「仮面の女神」は、こうした時代背景の後期の所産です。

（3）弥生時代～平安時代

遺跡はさらに少なく、わずかに上川沖積地の周辺に認められています。こうした現象は奈良時代まで続きますが、弥生時代の集落は主に上川・宮川沖積地に認められ、溝で囲まれた集落や墓が家下遺跡（ちの）につくられました。

古墳時代には永明寺山麓、上川沖積地、守屋山麓などに集中的に古墳がつくられます。狐塚古墳（宮川）をはじめ、諏訪地方の初期の古墳は主に守屋山麓の丘陵や台地上に築造され、6 世紀には、羨道付きの横穴式石室をもつ古墳群が扇状地や台地につくられ始め、副葬品に大陸の影響が強く見られるようになります。7 世紀になると石室は小型の長方形になり、墳丘も小規模化します。これらの古墳群を造営した人々は、前宮遺跡（宮川）、上原城下町遺跡（ちの）や構

井遺跡（ちの）などの扇状地や平地に集落を築いたと考えられています。

奈良時代に関する考古学的な痕跡は現状では極めてわずかですが、弥生時代と古墳時代の集落と重なり住居が認められます。終末期の古墳から、奈良時代と平安時代の遺物が出土する例が多く、これは後世に至るまで子孫などによる奉祀が続いた状況を示しているものと考えられます。

平安時代になると、上川沖積地の阿弥陀堂遺跡（ちの）に大きな集落がつくられますが、八ヶ岳西麓の台地や霧ヶ峰南麓の扇状地に小規模な集落が展開し始める状況が確認され、縄文時代末以降、居住の希薄であった八ヶ岳西麓等の開発が積極的に進められた様子がうかがえます。

2 中世・近世・近代

(4)中世

県宝「紙本墨書守矢家文書」をはじめとする文献資料と、干沢城下町遺跡及び上原城下町遺跡出土の考古資料から、諏訪地方の歴史の主要な舞台であったことが明らかにされています。

諏訪上社前宮（宮川）には大祝の居館（県史跡「諏訪大社上社前宮神殿跡」）が構えられ、大祝家を中心に神事や祭事が行われたほか、諏訪氏武士団を率いて諏訪神社の神威を背景に政治と軍事面で活躍しました。前宮周辺には「大町」と呼ばれる溝で区画された都市的空間を持つ中世の町が形成され、室町時代に信濃の安国寺が建立されました。宮川沖積地に広がる干沢城下町遺跡と荒玉社周辺遺跡は「大町」とみられています。両遺跡は 15 世紀後半で遺物が途絶えますが、文明 12 年（1480 年）の放火、同 14 年（1482 年）の水害に加え、同 15 年（1483 年）以降に大祝家と惣領家の争いが前宮神殿や干沢城周辺で繰り返されたことにより、城下町が衰退したとみられています。

一方、干沢城下町遺跡のある守屋山麓と上川を挟み対峙する永明寺山麓には、上原城下町（ちの）が展開しています。室町時代の終わり頃、惣領家が上原城（県史跡「諏訪氏城跡（上原城）」）とその居館（「上原城館（板垣平）」）で諏訪地方を治めるようになりました。上原城下町遺跡では 15 世紀末葉から 16 世紀初頭にかけての遺物が多く出土し、文明 15 年以降の争乱により、上社勢力が惣領家に統一されていく過程を反映しているものとみられています。天文 11 年（1542 年）に武田信玄は諏訪氏を滅ぼし、ほぼ 40 年間この地方を治めました。戦国時代にかけて上原城を中心とした城下町は、諏訪地方の政治・文化・経済の中心として繁栄しました。やがて政治の中心は上諏訪に移り、上原の地は農村へと変わっていきました。

中世の村落については、文献資料が極めて少なく、村落遺跡の発掘調査も限られているため、実態把握は困難とされています。それでも、『諏訪十郷日記』（建保 7 年･承久元年:1219 年）、『祝詞段』（嘉禎 3 年:1237 年）等の古記録から村落名を知ることができます。市域の平坦地を中心に、上川とその支流域の八ヶ岳西麓と霧ヶ峰南麓、及び宮川を望む守屋山麓と入笠山麓に村落がつくられ、その大部分は近世になっても同地域の村落として発展します。

(5)近世

戦国時代に諏訪地方の政治の中心は、すでに上諏訪に移っていたため、江戸時代の茅野市域

は高島藩が治める東筋と西筋に分かれていました。慶長７年（1602 年）に上川・宮川沖積地と山裾の境に徳川幕府による甲州街道が整備されると、これに伴い青柳宿（金沢宿）が成立しました。江戸時代の中頃になると、中馬の発達により物資の流れも盛んになり、交通の要衝として賑わいました。

茅野市域は、八ヶ岳西麓を中心に諏訪地方で最も多くの新田村が開かれました。天明５年（1785 年）に坂本養川によって「繰越堰」と呼ばれる滝ノ湯堰が開削されると、幾筋もの繰越堰が開削され、文化 13 年（1816 年）頃まで開田や畑直しが盛んに行われ、高島藩の宝庫として発展しました。この頃になると小倉織（諏訪小倉）が行われ、鋸鍛冶（諏訪鋸）や寒天製造も始まり、地場産業の基ができたとされています。

(6)近代

明治４年（1871 年）の廃藩置県まで、茅野市では高島藩による政治が続きましたが、その後は高島県に属し、筑摩県、さらに長野県の管下に入ります。この間、旧村を合併し、永明･宮川･金沢・玉川・米沢・北山・湖東・豊平・泉野の各村が成立しました。

明治 38 年（1905 年）11 月に中央線が開通すると、産業経済の発達に大きな影響を及ぼし、江戸時代からの米づくりを中心とした農業は、製糸業が発達するにつれ、養蚕業が盛んとなり、関連して蚕種業も盛んになりました。商工業についても、製糸業の発達はもとより、地場産業（寒天・鋸など）の生産・販路は飛躍的な発展を遂げ、商業の発展を促し、銀行や銀行類似会社の設立や郵便・電信・電話事業も開始され、また、主要道路の改修も行われました。

一方で明治元年（1868 年）の廃仏毀釈は、諏訪地方にも波及し、諏訪上社関係寺院の仏像・仏具などが、茅野市の寺院にも分散されました。

大正３年（1914 年）に勃発した第一次世界大戦は、糸価の高騰をもたらし、茅野市の養蚕業をさらに発展させ、桑園は全畑地の 90％近くにもなりました。林野では、造林・営林が一層進められ、明治以降行われた分割が次々と実施されていきました。

大戦による好況は、商工業の活動を活発化させ、製糸業は工場の集中化が進み、電気会社の設立や私鉄鉄道敷設の気運が高まり、金融業や倉庫業が発展しました。しかし、大正末期から昭和初期にかけての不況により、いずれも規模を縮小したり、廃止又は統合が行われました。

日本では、昭和２年（1927 年）に再び金融恐慌にみまわれた後、昭和４年（1929 年）10 月、アメリカに端を発した世界恐慌に発展し、二重の打撃を受けることになりました。

茅野市では恐慌による製糸業への打撃が、養蚕農家の繭価の暴落となり、借金がかさみひどい窮乏に陥りました。そのことから、組合製糸が各所に設置され、農民の利益を確保しようとしましたが、貿易の不振により衰退しました。

このような農村の不況対策は、農会を中心に農村経済更生運動となり、やがて満州への満蒙開拓団や青少年義勇軍の送出へつながっていきました。